

令和 6 年 6 月 1 9 日現在

機関番号：3 2 4 0 6

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019 ~ 2023

課題番号：1 9 K 2 3 3 2 2

研究課題名（和文）日英語二言語環境に育つ生徒の言語習得過程と母語の探求—日本と海外とを繋ぐ言語話者

研究課題名（英文）Exploring the Mother Tongue of Bilingual Children and their Language Acquisition

研究代表者

西 香生里（Nishi, Kaori）

獨協大学・法学部・特任助教

研究者番号：5 0 8 4 4 1 9 8

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日英語二言語話者の会話における言語習得と母語探求を目的とした実施計画に基づき、先行文献研究を行い、被験者2名の児童生徒と成人1名との各々の日本語会話を録音しテープ起こしをした内容の分析を示す。途中で新型コロナウイルス感染拡大となり、2019年度に対面で行った会話を今回の分析対象とし、2020年度にオンラインで行った会話は次回の研究とする。分析方法は発話データベースCHILDESのCHATフォーマット(MacWhinney & 宮田, 2004)を使用、初期と半年後の発話特徴の変化を確認した。発話が増え相手とのやり取りにおける態度にも肯定的変化が見られた。足場かけ理論との関連性も示す。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日英二言語話者の先行研究においては、幼児を対象とするものが多々ある一方で、小中学生を対象としたものがほとんど見られないことから、本研究より得られる知見を今後の小中学生の年齢にある子供達の日英二言語話者の教育に活かすことが学術的にも社会的にも考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study investigates and analyzed the transcripts of recordings of natural conversations in Japanese between an elementary school-aged child and an adult tutor, and a junior high school-aged child with the adult tutor, based on the previous researches done in the field of bilingual language acquisition between Japanese and English to seek their language use of their Japanese learning process and their possible mother tongue. Data was analyzed with the CHAT Format of CHILDES (MacWhinney & Miyata, 2004). The findings include the children's increased utterances over time and their positive attitude to carry on the conversation with the adult. Their positive attitude development in accordance with their language development could be supported by the Scaffolding from Socio-Cultural Theory.

研究分野：教育学

キーワード：日英語二言語話者 言語習得 足場かけ 社会構成主義

1 . 研究開始当初の背景

本研究は、日英語二言語環境に育つ児童・生徒の言語習得過程と母語を探究することである。彼らは将来、日本と海外をより潤滑な関係を保つ上で、異言語・異文化理解に貢献する人材の一端を担うと考えられる。その立場にある二言語話者のうち、日本国内在住で国際学校に通学する者の言語使用や言語形態、言語発達といった言語習得過程を精査する。日常会話を定期的に録音、音声言語データを詳細に分析し概念化し、言語習得の過程と母語レベルへの言語発達過程を見出し、類似の二重の言語文化背景を持つ今後の子供達の二言語教育に資するものを提起したい。

2 . 研究の目的

本研究の目的は、日英語二言語環境に育つ児童・生徒の言語習得過程と母語について明らかにすることである。二言語話者にある立場の児童・生徒のうち、日本国内在住で小学校、中学校の児童生徒期を国際学校に通学している者の言語使用や言語形態、言語発達といった言語習得過程を精査した研究はまだ少ない(中島他, 2017)。本研究では、日常生活の中で、学校生活はほぼ全て英語で行い、家庭生活は日本語という、二言語話者の複雑な言語習得の環境において、日本語で発していく言語使用を探り、彼らの母語を探究、類似の背景を持つ子供達の教室外の言語学習への示唆とする。

3 . 研究の方法

(1) 本研究では、以下の通り、被験者2名の児童生徒とその会話相手である成人との実験協力者を得て行う。録音した会話をテープ起こしし、膨大な言語データを漢字仮名表記の日本語からローマ字(ヘボン式)に書き直したうえで、発話データベース CHILDES の CHAT フォーマット(MacWhinney & 宮田, 2004)を使用し、研究者自身のファイルを2人分作成し、入力後分析を行った。なお、実験参加者の個人情報保護は遵守する旨、保護者と成人協力者に伝え、同意を得ている。

(2) 研究参加者は以下の通りである。 被験者：児童A(研究開始時に11歳)と生徒B(研究開始時に13歳) 被験者A,Bの会話相手C(成人の日本語の家庭教師、第三者に依頼)、データ収集・分析者(被験者の母親)。

(3) 研究実施方法は以下の通りである。 言語データの収集：2019年10月~2020年2月、隔週で対面の会話を録音し、ボイスレコーダーを使用した。1回の録音は、AとCが5分間、BとCが5分間、合計10分間とした。被験者と家庭教師と1対1での日本語会話である。子供達に取り、自然な流れになるよう、被験者には、家庭教師との日本語の勉強(各40分中の始め5分ずつ)(読み書きの前段階)の一部で、ウォームアップとする。その間、研究者は観察者として被験者と家庭教師との会話の様子を同じ室内の離れた場所で詳細に記述し、会話をしている際の各子供の話す態度なども記録を取った。 毎回録音終了後、ボイスレコーダーの各回合計10分間のデータを分析用のパソコンに移し、音声を書き起こしたものを発話データベース CHILDES の CHAT フォーマット(MacWhinney & 宮田, 2004)に入力し分析した結果を考察する。

4．研究成果

以下、自然会話実験後のデータ分析を基に、発話数と形態素の変化、そして、観察ノートの記録より、児童生徒の態度の変化について解釈を試みる。

被験者（児童生徒）と実験協力者（成人）の日本語会話録音後の音声を書き起こし、その日本語の漢字仮名表記をローマ字（ヘボン式）に書き直したうえで、発話データベース CHILDES の CHAT フォーマット (MacWhinney & 宮田, 2004) を使用し、研究者自身のファイルを 2 人分作成し、入力後分析を行った。参考までに、上記データベースには、他の研究者達の会話も記録されているが、今回の研究には使用していない。今回、被験者の児童 1 名と生徒 1 名の合計 2 名を個人情報保護に基づき便宜上、それぞれ Child (Jiro) と Child (Ichiro) とした。会話相手の成人は家庭教師の役割であるが、CHAT フォーマットには Tutor というコード名がないため、代わりに指定コード名にある Adult とした。

Child (Jiro) と Adult (家庭教師) との会話、および Child (Ichiro) と Adult (家庭教師) の会話、各々の録音を CHILDES の CHAT フォーマットで分析した結果、いずれも、2019 年 10 月と 2020 年 2 月とでは、発話数と形態素に増加がみられた。

Ichiro と家庭教師の会話では、2019 年 10 月 26 日の実施で、MLU (Mean Length of Utterances: 平均発話長) の分析結果は、“# of utterances”（発話数）が 16, “morphemes”（形態素）が 63, “Ratio of morpheme over utterances”（単語単位の MLU 値）が 3.938, “Standard Deviation”（標準偏差）が 3.112 であった。

Ichiro と家庭教師の会話では、2020 年 2 月 21 日の実施で、MLU (Mean Length of Utterances: 平均発話長) の分析結果は、“# of utterances”が 78, “morphemes”が 289, Ratio of morpheme over utterances が 3.705, Standard Deviation が 2.694 であった。

Jiro と家庭教師の会話では、2019 年 10 月 26 日の実施で、MLU (Mean Length of Utterances: 平均発話長) の分析結果は、“# of utterances”（発話数）が 18, “morphemes”（形態素）が 48, “Ratio of morpheme over utterances”（単語単位の MLU 値）が 2.667, “Standard Deviation”（標準偏差）が 1.732 であった。

Jiro と家庭教師の会話では、2020 年 2 月 21 日の実施で、MLU (Mean Length of Utterances: 平均発話長) の分析結果は、“# of utterances”が 88, “morphemes”が 348, Ratio of morpheme over utterances が 3.955, Standard Deviation が 3.244 であった。

このことから、二人とも発話数で Ichiro が 62 増え、Jiro が 70 増えており、大幅に増加したといえる。形態素は、Ichiro で 26 増え、Jiro では 300 増えている。言語発達の一環とみなせるであろう。一方で、単語単位の MLU 値は、Ichiro で 0.233 下がり、Jiro で 1.288 上がっている。これらの二人の被験者の間の違いについては、上記データと観察記録ノートの記述とも合わせて考えると、Ichiro が初回の会話では、聞かれたことに対して考えてなんとか日本語で言おうとする時に時間がかかり、注意して言葉を発していた様子が窺える。約半年後には、聞かれたことに一生懸命に思った言葉を遠慮なく次々と話していたように見えた。Jiro は最初からあまり遠慮することなく頭に浮かんだ言葉をそのまま次々と発していたように見受けられるが、Ichiro と Jiro の間には、1 歳半の年齢差もあり、学童期の間は言語差も大きく、単純には比較できない。家庭での親以外の成人との日本語会話を続けるという過程を経て、いずれも言語発達の促進に影響を及ぼしているのではないと思われる。

以上の会話の音声記録の分析結果の次に、児童生徒の会話時の態度の変化を観察記録ノートの記述から振り返ると、以下のことが示唆された。被験者二人に共通して言えることは、当初は、日頃の学校生活では、周囲ほぼ全ての言語は英語であり、英語で聞き話し読み書く活動に慣れて

いる分、幼稚園時代までの日本語が出てきにくく、口ごもったり、言いたいことはありそうだが、考えていた時間が長かったりと、同じ5分間でも発話数が少ない時は、態度もあまり積極的ではなかった。しかし、回数を増やすごとに、会話相手である成人の家庭教師より、会話の間は終始サポート的な立場で、子供の言いたいことを言いやすくするよう、何度も相槌を打って発話を促してくれたり、言い返してくれたり、聞いてくれる、ということがわかってきたのか、以前よりも、日本語で話すことに億劫さを感じなくなったと受け取られる。これは、ヴィゴツキーの提唱した Zone of Proximal Development (ZPD) (発達の最近接領域) にも通じ、それを受けた社会文化理論の Scaffolding (足場かけ) にも通じると考えられる。会話相手の聞いてくれるという安心感のある態度を受けて、一つ一つの会話にステップがあり、次の会話に行けるように、児童生徒自身に自信を持たせることに影響を及ぼしているといえる。よって、学童期から中等教育までを日本国内の国際学校で過ごす子供達は、日常生活は、学校では英語を使い、家庭では日本語を使い、という二重の言語文化の中にいる子供達には、教室外での学習には、親以外で、家庭教師のような役割を持つ成人との日本語会話が持てる機会が定期的にあると、より言語発達に肯定的な影響が期待されとの示唆が得られた。

以上を踏まえて、二言語話者の母語とは何かについては、中島(2010)に述べられている点を考察した。習得開始時期としては日本語かもしれないが、現在までの熟達度と使用頻度としては英語かもしれない、という点までは言及できるが、アイデンティティ形成過程にあり、結論にはまだ至れないため、今後の継続研究課題としたい。上記実験結果を基に近々論文投稿の予定である。

<引用文献>

- ヴィゴツキー 著、柴田義松・宮坂琇子 訳、教育心理学講義、2018、新読書社
ヴィゴツキー 著、土井捷三・神谷栄司 訳、「発達の最近接領域」の理論、2019、三学出版
中島和子 編著、マルチリンガルへの招待、2010、ひつじ書房
中島和子、継承語ベースのマルチリテラシー教育：米国・カナダ・EUのこれまでの歩みと日本の現状、母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究、2017、pp. 1-32
MacWhinney Brian、宮田 Susanne、発話データベース CHILDES 入門、2004、ひつじ書房
MacWhinney, B. The childes project: Tools for analyzing talk transcription format and programs. Volume 1. 3rd ed.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------